

## ○本報告書のとりまとめにあたって

### 【本報告書の趣旨】

当財団では、「地域の芸術環境づくり」を基本として、ソフト面・ハード面の双方から地域文化施設の実務担当者にとって関心の高い事柄を取り上げ、全国的な視点から調査・分析・研究を行い、地域文化施設の運営に役立てていただけるよう、その成果を報告書にまとめてきた。

本調査研究では、それらの成果を踏まえながら、地域文化施設をとりまく新たな環境や問題点を整理し、今後、地域文化施設が担うべき役割や取り組みについて提言を行おうとするものである。

### 【検討経緯】

#### ①研究会の設置

本調査研究では、芸術家、学識者、地域文化施設関係者等8名からなるの研究会を設置し、それぞれの専門的な観点から、地域文化施設が抱える課題や今後のあり方について検討するとともに、報告書のとりまとめについても議論を行った。研究会の委員は次のとおりである。

伊藤 裕夫	静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科教授
蔵 隆司	(財)神奈川芸術文化財団専務理事兼事務局長
坂田 裕一	(社)盛岡観光協会事務局次長兼総務課長、盛岡市観光文化交流センター副館長、岩手演劇協会副会長
櫻井 俊幸	小出郷文化会館館長
中川 幾郎	帝塚山大学法政策学部教授
中村 透	作曲家、琉球大学教授、シュガーホール芸術監督
平田 オリザ	劇作家、演出家、青年団代表、桜美林大学助教授、富士見市民文化会館キラリ☆ふじみプロデューサー
本杉 省三	日本大学理工学部建築学科教授

(五十音順)

## ②検討経過

2001年12月から2003年3月までの間に計7回の調査研究会を開催し、それぞれ以下のテーマで検討を行った。

第1回	2001年12月17日	「事例、課題などの発表、紹介」
第2回	2002年 2月25日	「地域文化施設の評価をめぐって」
第3回	2002年 5月10日	「文化芸術振興基本法と地域文化施設の今後のあり方」
第4回	2002年 7月 4日	「分権時代の地域文化施設像を踏まえて～これからの地域文化施設の担い手と様々な連携のかたち～」
第5回	2002年12月16日	「報告書（案）の検討①」
第6回	2003年 3月 5日	「報告書（案）の検討②」
第7回	2003年 3月26日	「報告書（案）の検討③」

## 【本報告書の構成】

本報告書は、研究会での検討事項をふまえた総論部分（第一部）と各委員からの提言（第二部）の二部構成となっている。

### ①第一部 「地域づくりの拠点に至るまでのプロセス」

研究会での検討事項を踏まえながら、地域文化施設職員の参考となるよう、地域文化施設が地域づくりの拠点に至るまでのプロセスを次の6つの段階に分けて整理した。本プロセスが第一部の目次となっている。

1. 地域文化・人材（住民）など地域をよく知り、  
↓
2. 内外の芸術を知り、アーティストなどとの関係を構築し、  
↓
3. 地域文化施設を地域文化づくりの拠点へと構想しつつ、  
↓
4. そのための組織や体制を整え、  
↓
5. 長期的な戦略で企画・立案し、実行し、  
↓
6. その評価を追跡・蓄積して新たな目標につなげていく

## ②第二部 各委員からの提言

研究会委員に、それぞれの専門家としての視点から、今後の地域文化施設のあり方について自由に提言をいただいた。

- |        |   |
|--------|---|
| 伊藤 裕夫  | 『文化におけるインターメディアリとしての地域文化施設』                 |
| 蔵 隆司   | 『地域の芸術文化に新展開を期待する～既存の多目的ホールを中心に～』           |
| 坂田 裕一  | 『市民協働と人材の活用』                                |
| 櫻井 俊幸  | 『地方の公立ホールのあり方』                              |
| 中川 幾郎  | 『地域文化施設と政策・施策「評価」について』                      |
| 中村 透   | 『市民とともにミュージッキング<br>～地域ホールの音楽工房から～』          |
| 平田 オリザ | 『公立ホールの諸問題ー特に演劇部門についてー』                     |
| 本杉 省三  | 『「地域文化」施設でも地域「文化施設」でもなく、<br>「地域文化施設」であるために』 |

注) 本報告書の内容および各委員の役職は、2003年5月末までのものである。